

『食用きのこ類の育種と栽培技術の開発と地域振興への貢献』

増野和彦（長野県林業総合センター）

この度、「食用きのこ類の育種と栽培技術の開発と地域振興への貢献」により、日本木材学会地域学術貢献賞を頂くことができました。関係者の皆様に心より御礼申し上げます。公立研究機関で働く者にとって、地域振興への貢献を認めていただくことは、何にも増してありがたいことであり、率直に喜んでおります。

きのこ栽培は、まずは原木栽培等で「山」に始まり、菌床栽培で「里」に下り、現在では、大規模な「工場」でも行われています。きのこ生産は、時代や環境の変化に対応しながら、農山村の地域産業としての役割を果たしてきました。また、きのこ生産は、生産現場の技術革新主導で発展してきた産業です。まず生産現場で新しい技術が開発され、試験研究はその後を追いかけるように理論的根拠を与え、その結果さらに現場の技術が改良されることの繰り返しでした。

したがって、研究を行うための発想のヒントは、全て生産現場にあり、可能な限りきのこ生産者の現場に足を運び、時代や環境の変化にも敏感であろうと、努めてきたつもりです。しかし、もとより微力のため、不十分な点多々ありますが、今回いくらかでも地域振興に貢献できたと認めていただいた、技術開発の概要を以下に紹介し、御礼に代えさせていただきます。

長野県は、きのこ全国生産量の30%以上を占めるきのこ生産県です。しかし近年、市場価格の低迷が続いています。小規模な生産者は採算が取れず、経営の継続が困難になってきました。そこで、山村におけるきのこ生産を維持するため、地域独自の品目・生産方式の開発と安定生産技術の開発を図りました。

クリタケは原木栽培でなければ生産できませんでしたが、系統選抜と培地開発により、我が国で初めて菌床栽培を可能にしました。さらに、パイプハウス等の簡易施設を用いた栽培で採算に合うことを実証し、クリタケ菌床栽培への道を開くことができました。

ヤマブシタケについても系統選抜と栽培技術の開発を行い、菌床栽培技術を確立しました。また、菌床栽培に適した品種を開発し、種苗法に基づいて「品種登録」を行いました。

ナメコの生産現場においては、子実体収量の低下や不発生となる現象がしばしば起きます。従来、これらの原因として品種の変異等の遺伝的要因が大きいとされて来ましたが、培養温度、培地組成等の環境要因も大きく関与していることを、生産現場に即して明らかにすることができました。

今後とも引き続き木材学会の皆様よりご指導を賜りますようお願いいたします。